

シンポジウム「カナダ聖公会から中部教区への贈り物」

リンダ・ニコルス主教（前カナダ聖公会首座主教）

×

西原廉太主教（日本聖公会中部教区主教）

【西原廉太主教】

リンダ主教さま、こんにちは。お時間をおとりいただき、ありがとうございます。

このオンライン対談では、私は日本の視聴者のために日本語で話します。リンダ主教さまのお話は、日本語字幕がつきます。私は風邪をひいていて、声があまり出ない状況です。私の声が聞きとりにくかったら申し訳ありません。それでは、日本語で話させていただきます。

よろしいですか？

日本聖公会中部教区のみなさま、こんにちは！今日は、日本聖公会中部教区宣教 150 周年記念特別企画といたしまして、オンラインではありますが、特別に、前カナダ聖公会首座主教のリンダ・ニコルス主教をお招きして、中部教区を創立からずっと支えてくださったカナダ聖公会の現在の宣教課題などをお伺いし、中部教区のこれからのヴィジョンを考える大切な機会とできればと願っています。

私は先週、喉の風邪をこじらせてしまいまして、このようなガラガラ声でお話することを、どうぞご容赦ください。

最初に、私から簡単に中部教区とカナダ聖公会のつながりについてお話しさせていただきます。愛知、岐阜、長野、新潟の 4 県におけるカナダ聖公会宣教師たちと日本人聖職たちの宣教の働きが強められていく中で、日本聖公会第 10 総会が、1911 年 4 月 26 日から 29 日まで、東京芝公園三緑亭において開催されました。この総会が、私たち中部教区にとって決定的に重要なのは、この総会において、日本聖公会の中に新たに「中部地方部」、当時は中部教区のことを中部地方部と呼んでおりましたが、中部地方部を設置することが決議されたからです。当時、国鉄中央西線が開通する見通しが立ったことも大きな要因ともなりました。

「カナダ聖公会へ伝道監督（これは主教のことですが）伝道監督招請状を送る決議（案）」が上程されると同時に、出席しておられたカナダ聖公会のロビンソン司祭が『日本にカナダ聖公会伝道教区を設置すべしとの提議についての所感』と題する小冊子を総会出席議員に配布し、今井寿道司祭はこれを受けて「カナダ聖公会が伝道教区を新設するのは、日本伝道に対する、カナダ聖公会の興味を増進する所以である」と決議案を説明しました。最終的に満場一致で決議され、1911年4月、日本聖公会に「中部地方部」すなわち中部教区の誕生が決議されたのです。

この日本聖公会総会の決議を受けて、カナダ聖公会側では1888年のロビンソン司祭の宣教開始以来、ことに愛知県、岐阜県、長野県を中心として展開されてきた宣教活動も、大きく進展する傾向にあることを認めると同時に、これら地方在住の教役者と東京間の連絡及び、在京主教によるこれら地方教会への巡杖往復も、実際には極めて困難であることを鑑みて、「カナダ聖公会宣教協会」(Missionary Society of the Church of England in Canada) これはM.S.C.C.と略されますが、M.S.C.C.は1911年9月8日に1912年1月1日から新しい中部地方部を設立するという議案を採択しました。

そして新しい中部地方部の主教として選ばれたのは、1892年以来名古屋を中心に宣教に働いておられたヒーバー・ジェームズ・ハミルトン司祭でした。ハミルトン司祭は、1912年10月18日、聖ルカ日ですが、聖ルカ日に、カナダ聖公会モントリオール教区の主教座聖堂で日本聖公会中部地方部、中部教区の初代主教として按手、聖別されたのです。それ以来、私たちは、この日を日本聖公会中部教区の組織成立日として記念し続けているのです。

日本聖公会中部地方部第1回地方会、まさに第1回の教区会は1913年3月26日、27日の両日、戦前の名古屋聖ヨハネ教会において開催されました。これは、今のヨハネ教会とは異なります。戦争で焼けてしまいましたので今は残っておりませんが、名古屋聖ヨハネ教会において開催されました。

実は私は、2017年にカナダ・トロントにありますカナダ聖公会資料室、アーカイブを調査させていただいたのですが、その際に発見しました資料の一つが、M.S.C.C.が1925年に発行しました、海外宣教活動を紹介する雑誌でした。タイトルはFrom the East and From the Westでした。そこには、当時の日本、中部地方部における宣教のさま子が生き生きと報告されています。また、1923年の関東大震災直後の日本の状況を踏まえた、日本の宣教をめぐる課題についてウォーラー司祭が書かれた論考を発見しました。それを私が翻訳したものを、ご紹介したいと思います。このような報告でした。ウォーラー先生の文章です。

「習慣を壊すのは難しいことである。日本人は何百年も「宗教的」祭りに群れることに慣れてきた。（「宗教的」としたのは、社会や国家は明確に宗教であると位置づけていても、その

中に「宗教」を見出すことは困難であるからである)。また、「祭り」である限り、それが仏教のものか、神道のものかを気にする風は微塵もない。彼らがキリスト者になった時も、彼らを毎週の礼拝に定期的に出席させることは至難である。しかし、彼らは、イースターやクリスマス、何か特別な大きな祭りには、集まりには総出でやってくる。特別礼拝や10月の秋の夜会キャンペーンには、大抵、聖堂が溢れるのである。多くのノン・クリスチャンが来訪し、聖書クラスへの参加を希望し、キリスト教を知りたいと申し出る。この内の何名かは、すでに教会問答を学び洗礼に備えている。しかしながら、私たちのあらゆる働きの真の果実は、まさに終わりの日まで明らかにされることはないであろう。

この1923年という年は日本にとって、この国の歴史のみならず、日本のキリスト教史にとっても、決定的に重要な年となった。歴史上、最も破滅的な震災と火災がもたらす、その最終的な影響については、私たちは、漠然と推測する他はない。灰の中から立ち上がる新しい東京は、より良い東京になるのであろうか。より良い道路や公園ができるだけでなく、より良い倫理性と精神性を持つことができるのであろうか。数時間の内に、あらゆる物質的なものが消滅するのを目の当たりにしつつ、精神的な富にこそ、より高い価値を置くことができるのであろうか。新しい横浜は、そして他の日本の地域は、これからも東京につき従い続けるのであろうか。日本は、この苦い経験から何を学び、何を戒めとするのであろうか。

私たち、日本の教会、聖公会においてもまた1923年は、歴史を画する年であった。日本のみならず、世界の聖公会宣教の歴史の中で初めてのことであるが、自立したその地の教会が自らの総会において二人の自国人の主教を選出し、日本の二大都市を含む二つの自治自給教区の長としたのである。東京の主教として元田博士、大阪の主教として名出司祭が選ばれた。ここにおいても、このことがもたらす果実を私たちは漠然としか想像できない。しかし、実に明確なことは、いよいよ日本に在る外国人宣教師たちは、後方から、後ろの方から、導くことが必要となってきたのだという点である。宣教師たちは、教え、促し、助言し、手助けし、宣べ伝えることが必要であるが、何事も限りなく己を伝えることなく、行われなければならない。宣教師たちは、この国民的に自尊心の高い人々の背後に立たなければならず、主要には、日本人を助けることを通して働くことが肝要である。そして、時には、日本人の下に立つことが不可欠なのである」

以上がウォーラー先生の100年前のメッセージですが、これは、100年を経た今の私たち日本聖公会中部教区の宣教課題にも、預言者的に通じるメッセージであると言えます。

こうした当時の中部地方部、中部教区における宣教の発展の背景には、ハミルトン主教の類稀な能力と、深い人格があったことは間違いありません。林由三司祭は、ハミルトン主教についてこのように述懐しておられます。

「ハミルトン主教に接触した教役者は、言葉を合わせて「彼は愛の人」であったと言う。愛は言うまでもなく極めて大切な徳であるが、統領の地位にある者にとってこれ程大切なものはない。それほどにハミルトン主教は教役者及びその家族を温かく扱った。例えば教役者に病弱者ができると、気候の温暖な魚の豊かな海岸地方へ任地替えをしてくれた。困った場合には経済的な面にも相談にのってくれた」

私が見出しました、トロントのカナダ聖公会資料室に残された手紙の数々から私たちが知ることができるのは、カナダ聖公会からの宣教師たちの慣れない土地、そして決して豊かではない生活や資源の中で、しかし、そのまさしくそれぞれに与えられた「ミッション」に、使命に、誠心誠意取り組む姿に他なりません。現在の私たちの中部教区、それぞれの教会、また私たちがあるのも、こうしたカナダからの宣教師たちの「苦闘」があったからこそであるということを私たちは心に刻まなければならないのです。

さて、それではいよいよ、リンダ・ニコルス主教さまから今のカナダ聖公会が取り組まれている宣教課題を中心にお話を頂戴したいと思います。リンダ・ニコルス主教は、1954年のお生まれで、カナダ聖公会ヒューロン教区主教などを歴任された後に2019年から2024年まで、カナダ聖公会首座主教をお務めになられました。カナダ聖公会初の女性の首座主教であり、また同時に世界聖公会、アングリカン・コミュニオンにおいても2人目の女性の首座主教であります。世界の聖公会、アングリカン・コミュニオンでは、第3期「聖公会・ローマ・カトリック国際委員会」(ARCIC)の委員や、また私も委員をさせていただいておりますが、世界聖公会科学委員会（アングリカン・コミュニオン・サイエンス・コミッション）の委員なども担っておられます。私も参加させていただきました2022年のランベス会議でもきわめて中心的なお働きをされておられました。

それでは、リンダ・ニコルス主教さま、どうぞよろしくお願いいたします。

【リンダ・ニコルス主教】

廉太主教、ありがとうございます。この特別な記念の時に、みなさまとお会いできて大変光栄です。

私たちの多くは、「ミッション・ステートメント」を掲げる組織で働いています。ミッション・ステートメントとは、その組織が外部に対して、その存在意義を表明するためのものです。そして、リーダーやそこで働く者は、そのミッションをどのように実行するか決定しなければなりません。セイコーウオッチのミッション・ステートメントは、次のとおりです。

「社会から信頼される企業として、常に革新を追求し、世界中の人々に感動を与え、笑顔あふれる未来を創造します」

この会社は、顧客のニーズや技術の進歩に応じて、さまざまな時計を製造することで、このミッションを実行しています。教会のミッション（宣教）について自問すると、それはどのようなものになるのでしょうか？それは、大いなる戒めによって私たち神の子どもたちすべてに与えられた、第一のミッションから始まります。

イエスは、「心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神を愛し、またあなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」と語られました。すべてのクリスチャンとすべてのキリスト教の共同体は、そのミッションを自分たちの状況においてどのように実行するか決定しなければなりません。

今回、私は、カナダ聖公会の宣教理解について、分かち合うようにとのご依頼を受けました。その考察をどのように表現すべきか考えたのですが、私は、カナダ聖公会での自分の経験と、その宣教に対する理解が過去 70 年間にどのように変化してきたかから始めることにしました。私の考察が、みなさんの状況における宣教理解についての議論のきっかけになれば幸いです。中部教区が 150 周年を迎え、神が今、みなさんをどこへ導いておられるかを考えるこの機会に、です。

私は、いわゆる「生まれながらの聖公会の信徒」です。聖公会の両親の間に生まれ、洗礼を受け、生涯を教会で育まれてきました。カナダ国内では、大草原地帯、バンクーバー、トロントなど、さまざまな地域に住み、海外でもインドに 5 年間住みました。また、20 年近く、教会の司祭として教会に仕え、その後、地方、全国、そして国際的なレベルで、補佐主教、教区主教、大主教、首座主教を務めました。私は 1950 年代に生まれ、第二次世界大戦後の北米が急速に発展した時代に育ちました。戦争は終わり、家族は再び集められ、ベビーブームが訪れました。都市が拡大するにつれて、あらゆる郊外に教会が設立され、建てられました。日曜学校も盛んでした。

そして、宣教理解は内部の成長に重点を置いていました。若いキリスト者の教育と育成です。また、礼拝と聖書研究です。教会が外向きに目を向けた際、その視線は海外やカナダの遠北地方への良い働きに向けられました。宣教師は、キリスト教の基盤がなく、言語、宗教、文化が異なる「他者」の地域で奉仕するために派遣されました。このような奉仕は、「神に召された者」のみが果たすべきエキゾチックな奉仕と考えられ、選ばれた少数の者たちの犠牲的な奉仕と見なされて、地元に残る人々は祈りと財政的支援を提供しました。伝道師、聖職者、主教、神学教育者などとして奉仕する者もありました。また、キリスト教の証しとともに、医療、教育、農業訓練に従事する者もありました。

当時「貧しいエスキモー」や「インディアン」と呼ばれていた人々（現在ではこのような表現は使用されていません）のために、古着の梱包が北部に送られました。執事がバンで移動式日曜学校を開き、カナダ北部の孤立した地域を巡回しました。また、聖職者は教会を設立したり、学校を運営したりしました。私たちの西欧の伝統を通じて表現されるキリスト教

の道が最良であるという前提が、根本にありました。19 世紀後半から 20 世紀後半にかけて、教会は政府と協働関係を結び、先住民の子どもたちを対象とした寄宿学校を運営しました。子どもたちは、孤立したコミュニティや土地にあった家庭から引き離され、寄宿学校で基本的な教育を受けるために生活しました。

現在私たちはこのことを深く後悔しているのです。私たちは、彼らが英語を学び、異教的とみなされる生活習慣を捨てた方が、より良い生活を送れるという前提で考えていました。私たちの植民地主義的な視点の傲慢さは、彼らの文化的自律性を否定していました。私たちは、当時の前提の一部として、英語社会と文化への統合が最善であると信じていました。先住民の知恵や必要に耳を傾けずに、です。これには、先住民を劣った存在と見なす組織的な差別が伴っていました。一部の学校は、身体的、感情的、性的虐待の場所となりました。子どもたちが家庭に戻った時には、彼らは自分の言葉を話すことができず、自分の文化の中で狩猟や漁業、罟猟を行うことができず、依存症、虐待、暴力の永続的な循環が世代を超えて影響を及ぼしてきました。

私たちは、神の愛と福音の「良き知らせ」を他者に伝えるという願望が、無批判に英国/ヨーロッパ文化と結びついており、私たちの言葉や行動に埋め込まれていることを検証していませんでした。1960 年代半ばまでに、北米文化には多くの課題が生じました。アメリカでは黒人たちが平等を求め、人種暴動が発生しました。若者たちは教会と国家に対して反乱を起こしました。新しい避妊方法の登場により、ベビーブームは終焉を迎えました。第二次世界大戦の残虐行為への反省は、神に関する深い神学的な疑問を提起しました。なぜ、キリスト教国がホロコーストを犯したり、長崎に原子爆弾を投下したりすることができたのか。

1960 年代、カナダ聖公会は、寄宿学校における施策の不平等さや、一部の学校における虐待や危害に関する報告が相次ぐようになり、この問題に関心を寄せ始めました。教会の関与が徐々に薄れるにつれて、多くの学校は閉鎖されましたが、その危害がもたらしたものは、今日のカナダ社会にも残っています。先住民たちは、和解に至るには 7 世代の時間がかかると言っています。

植民地主義も世界中で疑問視されるようになりました。多くの国が植民地支配者から独立を要求していました。フランス、イギリス、スペイン、ポルトガルなどの宗主国に対して、アフリカ、中南米、カリブ海地域、アジア、南アジアにおいて要求が高まりました。その過程は、平和的なものもありましたが、1940 年代後半のインドとパキスタンの分離のように、恐ろしい暴力にまみれるものもありました。こうした状況の中で、深く思い巡らしたキリスト者たちは、宣教の本質について深い疑問を投げかけました。

1963 年にトロントで開催された、世界聖公の宣教会議において、「相互責任と相互依存」

(MRI)という概念が提唱されました。宣教とは、福音を伝え、啓発するために、人々を宣教師として派遣することではありません。人々が行く場合は、その地域社会や状況において、神の宣教と招きとを見極める助けとなるためのパートナーとして派遣されるのです。これが、その後の宣教の決定的な目標となりました。キリスト教の指導者は、海外からの宣教師ではなく、土着の、その地域の人たちである必要がありました。その言語や実践において、状況に対応していく必要がありました。また、その文化にすでに存在する神とキリストの存在について、省察する必要がありました。そして、私たちは「他者」から学び、他の言語、文化、実践で表現される福音を学ぶ必要がありました。しかし、こうした変化の進行はゆるやかで、教会の活動の中に現れるスピードはさまざまでした。

私が青年になった頃、宣教とはまだ「福音を他の場所に伝えること」と定義されていました。1976年、私はイリノイ州アーバナで開催された大学間クリスチャン・フェローシップ会議に参加しました。何千人ものアメリカとカナダの若者たちが集まり、神学者や宣教師たちの話を聞き、自分たちが出て行って仕えるという召命を受けているかどうかを考えたのです。神の愛を分かち合うための犠牲的な召命を深いところで感じていました。しかし、私たちの傲慢さや「自分たちが最も知っている」という前提に対する掘り下げはほとんどありませんでした。

私はその召命に応え、インドのデリー北西部のヒマラヤ山脈にある国際キリスト教寄宿学校で音楽教師として赴任しました。その学校には、南アジア、中東、アジアから、世界中の大学に進学するための西洋式教育を受けるために生徒たちが集まっていました。そこでの働きとは、その地域のビジネスや政治のリーダーとなる若者たちを育成し、思いやりのある賢明なリーダーになる備えをするために福音を伝えることでした。私が生徒たちに大きな影響を与えたかどうかはわかりません。ですが、まったく異なる文化にどっぷり浸かり、自分の思い込みがあらゆる場面で試されたことで、私自身は大きく変わりました。他の信仰を持つ人々のグループの中で暮らし、極端な貧困と裕福さに直面し、白人、北米人である自分が享受している特権を理解しようと苦闘したことは、私の中に反省と変化をもたらしました。

また、過去のキリスト教の宣教の複雑な遺産も目にしました。農村部の病院は、切実に必要とされていた医療と健康教育を提供していました。多くの学校では、教師たちが識字率の向上を支援していました。植民地時代の名残も観察しました。湿気のためにオルガンは決して持ちこたえることができない土地に、オルガンを備えた英国風の石造りの教会があり、信徒たちは会衆席の長椅子には座っていませんでした。私は、超教派の宣教団体「インターサーブ」と協働していました。そこでの宣教とは今や、他の場所のキリスト者たちが、福音に対する自分たち自身の応答を考察し、それを育むことの支えるものだったのです。

カナダでこの考察に影響を与えた指導者は、セロ・パウルス先生でした。彼の父親は日本で宣教活動を行っており、彼自身も日本で育ったため、日本聖公会ではよく知られた人物でした。彼はトロントのトリニティ・カレッジの教授となり、70年代から80年代にかけて多くの人々に宣教学を講じました。神学校、農業、医学は、むしろ自分たちが必要とされなくなる状態の実現を目指して働いていました。

現地に先住のリーダーシップが必要とされており、文化的に適切な神学的考察によって分かちあわれました。また、宣教師たちが到着するずっと前から、その土地や文化の中に神はおられた、という事実を探求し、それを受け入れる動きも始まりました。そして問いました。「ここで神はどのように知られていたのか？」またこのようにも問いました。「私/私たちは何を学ぶことができるのか？」

1980年代以降、北米とヨーロッパの教会の教勢が継続的に低下し、現在では、教会や福音に接した経験がなく、クリスマスやイースターについての曖昧な認識しか持たない子どもたちが、何世代にもわたっています。教会は、私たちを取り巻く課題に直面していました。女性のリーダーシップの役割について、そして人間の性に関する見解が急速に変化する中で、課題を突きつけられました。キリスト者の責任がますます認識されるようになりました。隣人、貧しい人々、飢えた人々、ホームレスの人々、そして自分たちの社会で権利を剥奪されている人々を愛する、という責任です。

私たちの宣教が必要とするのは、言葉と行いによって福音を宣べ伝えること、すべての隣人にとっての共通の善を大切にし、神の愛、神の平和、シャロームを反映する共同体の構築を目指すことでした。人種差別、性差別、そして先住民差別に自分たちも結託してきたことが認識されました。

1984年頃、全聖公会中央協議会、ACCは、「宣教の5指標」を策定しました。神の国のよき知らせを宣言すること、新しい信徒を教え、洗礼を授け、養うこと、愛の奉仕によって人々の必要に応答すること、社会の不正な構造を改革し、あらゆる暴力に反対し、平和と和解を追求すること、被造物の本来の姿を守り、地球の生命を維持・再生するために努力すること。要約すると、「伝える、教える、世話をする、変革する、大切にする」となります。これらは、洗礼神学の刷新と並行して生まれたものです。カナダの洗礼の誓約における試問は、この「宣教の5指標」を反映しています。

神を愛し、隣人を愛することは、私たちの生活のあらゆる面に浸透しなければなりません。

家庭、社会、教会、そして国家においてです。そしてそれは、洗礼、礼拝、学び、告白/悔い改め、そのものについてでもありました。それは、正義、すべての人間の尊厳、そして平和を求め、神に創られたものを大切にするという、他者に仕えることそのものでもありまし

た。宣教とは、世界のどこか別の場所で行うものなどではありません。それは、私たちがどこに置かれていたとしても、キリスト者としての生き方なのです。

私たちは、神の国への道を示すために、自分たちが行うように招かれていること、あるべき姿を認識し、今、私たち一人一人、そして神の愛と正義の共同体として、その可能性の灯を私たちの内に、また私たちを通して、ともし始めるのです。それは、「ミッシオ・デイ

(Missio

Dei)」、すなわち、この世における「神の宣教」において、神と共に働く者となることなのです。聖書は、私たちに、その「神の宣教」の物語を伝えています。どのように、神は人間と協働関係を結ぶことを選ばれたかという物語です。ヘブライ語聖書（旧約聖書）は、神とアブラハム、モーセ、ダビデとの契約、その契約に対する人間の忠実さと裏切り、そして、「神の宣教」を分かち合う別の道—イエスに従う者として、神と隣人を愛して生きること—を示すために、イエスを遣わされた神の決断について語っています。そしてそれは、神が聖霊を通して世界へと手を差し伸べ、私たちの身のまわりで働かれ続けておられるのだと知ることなのです。

私たちの召命とは、神の臨在を認識し、神を知らせ、私たちのうちに、また私たちを通して、イエス・キリストの生の生きた証人となることなのです。私たちは、選択や召命、歴史の偶然によって、世界の別の場所で生活していたかもしれません。別の状況の中で自分の召命を生きていくのであれば、そこにすでにおられる神の臨在に謙虚に耳を傾けて、その状況に受け入れられ、自分が神について知ってきたことを分かち合いつつ、何を学ぶのかを問うべきなのです。

つまり、宣教とは今や、私たち自身の状況の中に見出されるのです。神は、私たちにここで何をしよう、どうあるよう求めておられるのか。今、この時に、神との関係を、どのように分かち合い、理解すべきか、証しすべきか。今、私たちは、これまで想像もできなかった方法で福音が表現されていることに気づかされています。私たち自身の言語以外の言語で、そして想定外の場所で神の臨在を発見しています。私たちは、キリスト者の交わりの内外を問わず、他の人々と協力するよう求められています。私たちは、キリストにある兄弟姉妹たちと物理的な空間を共有し、宣教の働きを共にしています。

私たちは、地域社会の共通の善のために、善意の他の人々と協力し、聖霊に耳を傾けています。そして、ここカナダでの私たちのミッションは、日本でもまた同じだと思いますが、「心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして神を愛し、隣人を自分と同じように愛すること」です。日々の、あらゆる状況の中で、深い喜びを持ちながら。

ありがとうございました。

【西原廉太主教】

リンダ主教さま、大変素晴らしいお話をありがとうございました。とりわけ、1963年にカナダ・トロントで開催されました、世界聖公会の宣教会議である「アングリカン・コングレス」のお話は、非常に重要であると思いました。それまでの欧米の宣教師たちによる宣教論は、いわゆる植民地主義的伝道と言われるものでしたが、世界の聖公会においてもアングリカン・コングレス以降、お話の中にも登場いたしました「ミッシオ・デイ」（神の宣教）という宣教論が強力に打ち出されるようになりました。それまでは、神は教会を通して世界に働かれるという考え方でしたが、ミッシオ・デイ以降は、教会や宣教師よりも先に神はすでに世界の周縁においても働いておられるのだという、教会はむしろ世界から宣教の課題、アジェンダを与えられる、という考え方に転換したのだ、ということだと思います。そこで重要なキーワードは、リンダ主教さまのお話にも出てまいりましたが、「コンテクスチュアル」（文脈的）であるということ、すなわち、その土地の文化や伝統、状況の中でいかに福音が語られ、表現されるか、ということだと思います。

そう考えますと、今から 100 年前にこの日本の中部教区の地で宣教にあたってくださいましたカナダ聖公会の宣教師たちは、決していわゆる植民地主義的な伝道を強制したのではない、ということですね。むしろ非常に現代的な、ミッシオ・デイ的な、コンテクスチュアルな宣教をされていた、という事実には私は大変大いに感銘を受けております。

例えば、長野県の岡谷という町にあります、岡谷聖バルナバ教会を創立されたホリス・コーリー司祭は、ケベックのご出身でしたが、コーリー司祭は、もともとカナダのケベックのいわゆるファーストネーション、先住民の子供たちのために働いておられたという経験もあられたということだと思いますが、コーリー司祭は当時の岡谷の地のコンテクストに思いを馳せられた。1920 年代当時岡谷の町は製糸工場の町だったのです。人口が約 6 万人でしたが、その 7 割 8 割は 10 代から 20 代の若い女工さんたち、女性の労働者たちだったわけですが、その町で、製糸工場の町で最も辛い思いをしている若い女工さんたちのために、彼女たちが実家に帰ったような思いをしてもらいたいと願って、岡谷聖バルナバ教会を建てられたのですが、今でも岡谷の教会はそういうわけで日本式の畳、畳敷きの聖堂なのです。

例えば、1932 年にウォーラー先生が建てられた、上田聖ミカエル及諸天使教会は、日本伝統の木曾ヒノキを使用して建築された、世界でも大変珍しい、神社仏閣様式のキリスト教会となっています。ちなみに岡谷の教会や上田の教会をはじめ、長野県の教会の多くの教会が日本の国の文化遺産に登録されています。素晴らしいことですね。

また、中部教区は、日本聖公会の 11 の教区の中でも、最もミッシオ・デイ、神の宣教の神学を積極的に受け止めて、この地における、地域や社会、世界における正義と平和、すべてのいのちの課題に向き合ってきた教区であるということは自信をもって言えます。ちなみに

日本聖公会で最初の女性の執事、女性の司祭も、渋川先生という方で、つい先日亡くなられたのですが、私たち中部教区です。

そういう意味で、ミッシオ・デイを真剣に受け止めてきた教区なのですが、それはやはり、戦後、第二次世界大戦後に中部教区に関わってくださった、カナダ聖公会からの聖職者たちの貢献が非常に大きかったと思います。とりわけ、先ほどリンダ主教のお話にも登場しましたセロ・パウルス先生から私たちが教えられたことの重要性は語り尽くせないものがあります。私自身がパウルス先生から大変お世話になり、私の論文を英語に翻訳して紹介してくださり、私もパウルス先生の本を日本語に翻訳させていただきました。

また、カナダ聖公会のご出身で、のちにソロモン教区の主教になられたテリー・ブラウン主教にも、私たち中部教区の者たちはさまざまなことを教えられ、示唆を与えられました。テリー・ブラウン主教は、1995年に清里清泉寮で開かれた、日本聖公会宣教協議会にも出席くださって、重要な英文の報告をまとめてくれていまして、その中で、日本聖公会が翌年の1996年の総会で決議した、「戦争責任に関する宣言」を高く評価してくださいました。1995年の日本聖公会宣教協議会の宣言は、小さくされた者たちとともに、いかに私たちは歩むことができるのかということを骨子とした宣言でしたが、これもテリー・ブラウン主教は大変高く評価して、海外に紹介してくださいました。

リンダ主教は、今、カナダ聖公会が直面されている課題として、先住民の子供たちの学校の問題と、それに対するカナダ聖公会の罪責告白と和解について、大変重要なお話をくださいましたが、教会としての罪を告白し、和解という道筋がいかに大切であるかを教えてくださったのも、実はカナダ聖公会のみなさんです。

日本聖公会が1996年の総会で、戦争の責任に関する宣言を公表してから、それ以降、韓国聖公会からたくさんの司祭さんたちが日本に来てくださり、日本聖公会の宣教を助けてくださっています。この中部教区も、丁胤植司祭をはじめ、韓国からの聖公会の司祭さま方に大変助けられています。私たちの教会にとって、いかにこの罪責の告白と和解というものが重要であるかという、そのヒントを与えてくださったのがカナダ聖公会のみなさんだと思います。

昨年のおイースターの直前、敬愛するテリー・ブラウン主教さまは主のもとに召されました。

79歳のご生涯でした。私も生前、大変にお世話になったわけですが、実は、テリー・ブラウン主教さまは、ちょうど亡くなる直後に開催された、1963年のアングリカン・コングレス60周年を記念する国際学会、これはトロントで開催予定されていたわけですが、その会議のコーディネーターもなされていました。テリー主教さまから、私も何か発表しなさいということを勧められて、実はその中で紹介したのが、テリー・ブラウン主教が1995年の

日本聖公会宣教協議会でまとめられた、英文の報告でした。そのようなことをただいまリンダ主教さまの話を伺いながら思い巡らしたところでございます。

さて、ここで少し、リンダ主教さまと意見交換ができればと思いますが、リンダ主教さまのお話の中でも言及されておられたのですが、実は、今中部教区が大変悩んでいるのは、若い青年たちや子どもたちがなかなか教会につながらない、青年たちや子どもたちの参与が希薄になっていることをどうしたら良いのか、という問題です。カナダ聖公会では、そうした青年たちや子どもたちへのアプローチ、取り組みを、どのようなことをなさっているか、もう少し詳しく教えていただくことはできますでしょうか。

【リンダ・ニコルス主教】

ええ、その懸念には私も完全に共感できます。なぜなら、私たちも同じ懸念を抱えているからです。多くの教会で、若者たちは教会を、おそらくはせいぜい「無関係」と捉えています。彼らは教会を年配者のための場所だと考えており、これは私たちにとって大きな課題となっています。私たちが彼らの幼少期に、育成のための十分な深みを持たせることができなかったことに一因があるかもしれません。そのため、現在、私たちはどのように若い人たちとつながるべきかという課題に直面しています。

いくつかの仕方、教会全体というよりも、教会のさまざまな場所で見つかる姿を見ることができると思います。それは、状況や聖職者、周囲の地域社会に依存します。ある人々は、礼拝を通じてつながっています。聖公会の礼拝に、その深い伝統とのつながり、その美しさ、形式や構造に魅力を感じる若者たちもいます。

また、彼らが抱える問題を通じて、若者たちとのつながりを見出している人々もいます。とりわけ、創造に関する問題です。若者は、私たちが地球に対して行っていることに対して情熱を持っています。そして、創造の賜物を、私たちが支配するのではなく、管理する者としての責任という理解と、若者たちの情熱とを教会が結びつけることができれば、プロジェクトなどを通じてつながる機会が生まれる可能性があります。多くの若者は社会正義への関心を持っています。再び、社会正義の問題を通じてつながるのです。

私たちが直面した課題の一つは、若者と親の間に大きく異なる見解がある点です。カナダの文脈においては、多くの若者たちにとって、性別アイデンティティや、人間の性に関する問題において特に顕著です。親の世代は、LGBTQの問題や同性愛について考えること自体が非常に困難だった時代に育ちました。そして今、私たちは性別アイデンティティや、トランスジェンダーであることが何を意味するのかを理解するという問題すべてに向き合っています。若者たちはそれを問題と思いません。それはまさに彼らの学校や友人たちの現実

の一部なのです。そのため、若者たちは私たちの躊躇を不思議で不快に感じているのです。彼らはそうではありません。

私たちは、教会の伝統と、イエス・キリストに従う者として生きるという伝統をどのように調停させるか、それを理解するために苦労を重ねてきました。それが私たちの道徳的な期待や倫理的な実践においてどのような形を取るのか、ということです。そして、あえて言えば、双方が互いに学ぶ機会を残すような、防御的でない形で会話を交わすことが、私たちはあまり上手ではありません。なので、私は、年配の世代は若い世代から学ぶ必要があると考えています。そして、若い世代も、親や祖父母の中に、自分たちが普段は気づいていない知恵があることを認識する必要があります。

私自身の若い世代との経験は、一緒に何かに取り組む機会がある時に、本当に深いものとなってきました。カナダ聖公会では、20 歳から 27 歳までの若者たちの一団を聖地へ連れて行きました。イスラエル、パレスチナ、ガザを訪問するためです。そして、自分たちが絶対に少数者である国でキリスト者であるとは、どういうことなのかを考えました。彼らのほとんどは、自分たちがある種の多数派であるユダヤ・キリスト教の国に住んでいるからです。

彼らと関わり、互いに話し合えたことは、本当に素晴らしい経験でした。その結果として生まれた深い友情は、現在も続いています。彼らは WhatsApp (SNS) グループで集まり続けています。そのような、特別な目的のために集まる機会があります。

私たちの先住民キリスト者の若者たちは、先住民の長老たちと集まり、自分たち自身の霊性について学び、それがキリスト教の福音とどのように交わるかを学んでいます。宿泊プログラムで集まる活動です。それらは、良い機会となります。そして、若者たちを巻き込むこと、彼らが「未来の教会」ではないことを認識することです。彼らは「今」、教会の中にいるのです。ですから、若者たちの貢献を歓迎しなければならないのです。聖書を読むように招き、礼拝に参加し、教会の生活の一部となり、彼らが何を必要としているかを教えてもらうことです。彼らが実際に起きているのを見る時、若者たちの中に、より大きな活力を感じることができるのです。

【西原廉太主教】

ありがとうございました。大変重要なキーワードをいただきました。とりわけ LGBTQ や、ヒューマン・セクシュアリティの課題というのはとても重要で、中部教区でも大切に取り組んでいます。中部教区の大聖堂、主教座聖堂では、月に 1 回、性的少数者のための聖餐式を行っています。そういうところに若い人たちも関わってきてくれるので、このような取り組みなどをより丁寧にしていくこと。

また、ただいまのリンダ主教の話でなるほどと思ったのは、海外とのつながりですね。聖地巡礼の旅をされているということですが、いわゆる聖地巡礼ではなくガザの問題をどのように若い人たちが考えるのか。そのような経験を、中部教区も、沖縄やフィリピンなどに青年たちも一緒に行くスタディーツアーを長年やっていますが、そういった、実際に現場を訪れること、そういった現地で顔と顔がつながる関係を私たちが経験することは、やはりとても重要だと思いました。

最後にリンダ主教のお話で、あらためて大切だと思ったのは、ともすると私たちは青年や子どもたちは未来の、といったニュアンスで語りがちですが、リンダ主教さまのお話で、青年たちは決して未来のための人たちではなくて、今ここでの大切な参与者なのだと、存在なのだということですね。そのことを、今一度中部教区でも確かめていきたいと思いました。

次の質問をさせていただければと思いますが、現在、日本聖公会には 11 の教区があり、信徒数は実質 1 万 5000 ぐらいでしょうか。日本聖公会は管区としても、とても小さな教会です。その中に 11 も教区があり、それぞれ、聖職の数も少なくなり大変厳しい状況に置かれている中で、しかしながら、より前向きにこれからの宣教を歩むために、現在日本聖公会では教区間の協働を進めています。新しい教区の新設などに向けた協議が進んでいるのですが、カナダ聖公会ではそのような教区間のパートナーシップなどの事例はありますか。

【リンダ・ニコルス主教】

カナダは広大な国なので、とっても、とっても小さな教会がたくさんあります。そして、人口の 85%はアメリカ国境から 200 キロメートル以内に住んでいます。その北には広大な地域がありますが、教会の規模は非常に小さくならざるを得ません。北部の教区の中には、非常に小さなものもあります。教区には数箇所の教会しかなく、有給の聖職者はごくわずかで、宣教や牧会の仕事はボランティアに頼っている場合もあります。そのように、私たちも実際、困難な課題に直面しているのです。なぜなら、教区の体制を維持するための財政的負担が、これらの教区の一部にとってはあまりに過大だからです。私たちは、管区として、私たちの体制がこのままで良いのか問わなければならない局面にあります。

この体制は果たして機能しているのか？変革が必要なのではないか？という問いです。これらの議論は簡単ではありません。一部の人々は、教区数を減らすべきだと考えていますが、その場合、教区は地理的に非常に広大になります。一人の主教がそれをどのように管理するのか、私には想像もつきません。同時に、一部の地方では、特に人口の多い地域や人口移動のある地域などで、教会設立が進んでいる地域、会衆が成長している地域があります。

特に都市の中心部では、文化的に単一言語の共同体が形成されています。移民によって世界の他の場所から人々が集まってくるようなところでは、彼らは礼拝をしたいと思っています。しかし、彼らは何よりも自分たちの母語で礼拝したいと思っています。そのため、ポルトガル語の教会やスペイン語の教会があります。また、トロントには日本語の教会もありました。それが今でも続いているかどうか、残念ながら分からないのですが。私たちはそのような教会を設立しています。

また、本来の意味での教会設立という宣教を意識している、より大きな教会もあります。教会が非常に大きく、必要とされる地域に、です。例えば、トロントのセント・ポール・ブロー・ストリート教会は、そのような教会設立活動を行っています。しかし、それはあくまでも例外で、一般的ではありません。私たちは本当に、福音の良き知らせを人々に伝えるという意味での伝道、それが人々への招きであるということを、学び直す必要があると思います。私たちは心の中でそれを知っています。

しかし、聖公会、特に英語圏の聖公会は、伝道について非常に私的な感覚を持っている傾向があります。そして、「よし、自分の信仰についてもっとオープンになろう」と言うには、私たちにはかなりの努力が必要です。また、「来て、見なさい」と招く時に、誰かの心を変えることは私たちの責任ではありません。それは聖霊の責任なのです。ありがたいことに、それは神さまの側の問題なのです。

しかし、私たちが招く者となることは私の責任であり、そして、神さまの愛の、目に見える表現となることで、人々が来たいと思うようにすることは私の責任なのです。それゆえ、私たちには、神さまに愛されているとはどういうことかを表わす時には、より開かれ、より寛容でなければならない、という大きな課題が背負わされているのです。そして、私は、より開かれた人々を見出しています。そして、キリスト教の信仰を恥じることなく、公の場で証しする人々を見出しているのです。それは本当に励まされることです。

物事が少しでも良くなることを示す小さな火花、小さなしるしを見出だしています。少なくとも、私たちはより誠実な者となっているのだ、というしるしです。それが結果として、教会の成長につながるのかどうかは、私にはわかりません。しかし、私は、それこそがチャレンジだと思うのです。それは、私がどこに赴いても、主教や聖職者たちから聴くことなのです。

【西原廉太主教】

ありがとうございます。そろそろ終了の時間が近づいてまいりました。最後にリンダ主教さまから、日本聖公会中部教区の宣教 150 周年を迎える私たち中部教区の者たちに、メッセージを頂戴できますと幸いです

【リンダ・ニコルス主教】

お祝いと祝福のメッセージを差し上げるのは、いつも喜びです。とりわけ、150 周年の記念すべき時を迎える教区に対しては、なおさらです。

カナダ人たちが、この教区の発展のために貢献できたことを深く感謝しています。そして、西原主教のお話を伺って嬉しく思いました。それは、カナダ人たちが、物事を進めるにあたって植民地主義的な態度をとらなかったこと、そして、それによって中部教区が文脈的な宣教と奉仕の業の深い根を育て、日本のこの地域の人々のために仕えることができたことです。これからもずっと祈り続けます。働きが実を結ぶように。イエス・キリストを通して神の愛の証し人であり続けるように。自分の教区において、この時に適切で最善の方法で。

記念の時というのは、これまでどうしてきたかということを振り返り、祝うときであることは承知しています。しかし私が願っているのは、これから起こること、これからできることの可能性もまた、祝ってほしいということです。そして、神さまがあなた方を通して、みなさんのこの教区でなさろうとすることの大きな夢とヴィジョンとを描いてほしいのです。記念の時というのは、山頂に立ち、長い登山の道のりを見下ろすようなものです。しかし先には、下山して次の山に登ることも見据えています。

ですから、みなさんのための私の祈りは、みなさんがこの 150 周年の記念を喜び、祝うこと、これまでの 150 年間を通して得た勇気と力と知恵とを、次の 150 年に進んでいくように用いること、そして、神さまの深い愛がみなさんの心に、声に、そして行うことすべてに満ちあふれ、神さまの愛の証人となりますように。ここ、カナダ聖公会の私たち皆から、お祝いと心からの祝福をお送りいたします。

【西原廉太主教】

リンダ主教さま、ありがとうございました。本日、私たちが、リンダ主教さまから学びましたことは、私たちの宣教とは、どこか別の世界でなされる出来事ではなくて、まさに私たちが日々生きるこの足元の、いま、ここでの働きなのだという事です。

それは、決して難しいことではなくて、実は非常にシンプルで、私たちが主を愛するように、私たちのとなりびとを徹底的に、喜びをもって愛するように、私たちは洗礼を受けた時に召されているということを決して忘れないで、それを日々実践する、ということなのだ。

そのことを、あらためて確かめたいのです。

その上で、私たち中部教区にとっての、隣り人とは誰なのか、中部教区それぞれの教会にとっての隣り人とは誰なのか、また、究極的には私たち一人ひとりにとって、またあなたにとっての隣り人とは誰かを思い巡らしていきたいと思います。

リンダ主教さま、本日はお忙しいところ、まことにありがとうございました。最後にこのセッションを閉じるにあたりまして、リンダ主教さまから、お祈りと祝祷をお願いできればと思いますが、お願いしてよろしいでしょうか。

【リンダ・ニコルス主教】

祈りましょう。

いつくしみと愛の神よ、あなたを愛し、自分のように隣り人を愛するようにと、あなたが私たちをお創りになったことを感謝します。

イエス・キリストによる福音の賜物のゆえに感謝します。福音は分かち合うことができます。私たちがどこにいても、世界のどの場所にいても、どのような状況にあっても、どのような困難の中でも、どのような喜びにあっても。

中部教区のために祈ります。中部教区の指導者、主教、聖職、信徒を祝福してくださいませうように。あなたの愛の証人であり続け、良き知らせの物語を語り続け、イエスに従おうとしてやってくる人々を養い続け、教区に関わる、助けを必要とする、すべての人々にとって、あなたの愛のしるしとなり、光となりますように。教区が必要とするものすべてをお与えくださいますように。あなたが教区を召し出し、実現しようとされている宣教に必要なもののすべてを。

そして、中部教区の上にあなたの祝福を祈ります。あなたの励ましと力とが中部教区の上にありますように。

全能の神、父と子と聖霊の祝福が、今も、世々に限りなくありますように。

アーメン

【西原廉太主教】

リンダ主教さま、本日はまことにありがとうございました。大変興味深いお話ができましたことを感謝申し上げます。